



3  
「春」

逃げる月、二月。僕も逃げたい。何を隠そう、実は春に苦手意識を持っているのである。

春になるとやたらと明るいキャンペーンが増える。いつかの春、僕は大船にいた。その少し前に電車の中から見た「白い巨大な観音様」が自分にしか見えていない幻だったのではないかと思えてならず、確かめに行ったのだ。

到着し、街を歩く。小さいながらも活気のある店が立ち並び、かつて映画スタジオがあった場所だけに文化的な雰囲気を感じる。だが観音様はどこにいるのだろうか？

一旦その目的をわすれ、家電量販店に立ち寄った。スマホを替えようかなと思っていたんだ。別に、今日とっていたわけではなかったが「春のキャンペーン中」という看板に惹かれた。

売り場を彷徨う暇そうな若者を接客のプロが放っておくわけがない。乗り換えると安いとか、今ならポイントがたくさん付くとか、色々と説明をしてくれる。思っていたよりも安い。春風のような軽妙なトークで楽しい気分になったのもあいまって、買い替えをお願いすることにした。

その時だ。「遠く離れたご家族にデジタルフォトフレームはいかがですか？無料で差し上げますよ」と、全く予期しないことを言われた。いらないと思いい丁寧に断ったが、食い下がられてしまい、スマホの件でよくしてもらったのもあったので、「じゃあわかりました」と答えた。するとさらに、「通常、無料プレゼントは一台限りなのですが、

春のキャンペーン中なので2台でも3台でもどうですか？」と畳み掛けてくる。さすがにそれはきっぱりお断りし、会計を済ませた。

実際のところ、たしかに本体代金は無料なのだが、毎月の利用料金がかかる。笑顔がスーツを着ているような明るい人だったが、大事な部分の説明が足りていない気がした。しかも2年縛り。そんな少々強引な営業に引っかかりもしたのだ。浮かれた春のせいだ。

その後、もといた場所の反対側でようやく対面した白い観音様は、驚くほど大きく、当然ながら僕だけでなくすべての人に対し平等に優しげな表情を向けていた。

またいつかの春、家の周辺を頻繁にツバメが飛んでいた。はじめのうちは姿を見かける程度だったが、いつしか家の敷地内にまで入ってくるようになった。

小さな体だが、鳴くと声が響くので来たらすぐにわかる。こっそり観察すると、どうやら「羽だけでは足りないようだ。つがいのツバメがコミュニケーションをとりながら、せわしなくあたりを物色している。思わぬ来客に、ちょっとした緊張が走る。刺激しないように、邪魔をしないように、気を遣う。家主はこちらなのだが。

当時の家にはビルトインガレージがあり、ツバメはそこにやってきた。この場所なら雨風をしのげるため、彼らにとって都合がいい。案の定、数日のうちにそこで巣作りを始めた。先日の来訪は、ツバメご夫婦の「内見」だったわけだ。

黒色のツバメは表情がわかりづらいが、よく見ていると、まんまるな目とツンととがたくちばしがなんとも可愛い。僕は小さくない愛着を持つようになっていた。似たもの夫婦だったが、尻尾の長さにちがいがあった。見ていて楽しい。

彼らは、見た目は賢そうなのだが、あまり巣作りに慣れていないようだった。というのも、ガレージの右上隅に泥や草のようなものをせっせと運んでくるのだが、それらが壁面に全然くっつかず、床に散乱してばかりなのだ。経験の浅い、若い個体なのか？僕はいてもたってもいられず、若夫婦がいない隙を見計らって巣を作っている箇所の下に傘を広げて持ち手を天井に向け、落ちてきた資材を掬えるようにしてみた。以前どこかでツバメの巣を見た時にそうしてあったのだ。もっともそれは、フンを受け止めるために設置されているようであったが。いずれにしても僕ができる唯一のことだった。すると、応援の気持ちに通じたのか、少しずつ家の土台らしきものが出来上がってきたではないか！よかった。これでひと安心だ……！

しかし、翌日、様子を見にいつてみると、昨日までそこにあったものが見当たらない。視線を下へ移すと、せっかく形になってきた巣が、ごっそり落下しているではないか。家庭を築く幸せな家となるはずだった泥や草のかたまりを、傘が受け止めていた。

それ以来、ツバメは来なくなった。

少しだけ後悔が残った。傘を置いたことで警戒されてしまい、別の場所に移ったのではないかと。真相はわからないが、いずれにしても僕は、急に彼らが来なくなったことをさみしいとおもった。

昨年の春、病院にかかった。

行きたくて行く者はまれだろう。気分とは裏腹に、晴れやかな日だった。春というより初夏のようにも感じられる暖かさで、時折強い風が吹いている。

建物側から外へと自動ドアを抜け、「いい天気だなあ」と青空を見上げた瞬間、ツバメの巣が視界に入った。ちょうど雛たちが大きく口をあけて親鳥に餌をせがんでいるところだ。親鳥がツンととがったくちばしで順番に餌を与えるが、雛たちは待ちきれず口をパクパクさせて鳴き声を上げている。コーラス隊が歌っているような感じだ。来た時にもここを通ったはずなのに、なぜ気がつかなかったのだろう。

その巣の下には、ビニール傘が逆さに広げてあった。

僕の家を去ったあのツバメは、新しい場所で家族を守れただろうか。

また、春が来る。